

白血病などで正常な血液が骨髓でつくられなくなった人に、血液の元となる造血幹細胞の移植を仲介する日本骨髓バンクができて三十年。だが、希望する患者の五割強しか移植を受けられていないのが実情だ。移植を増やすため、同バンクは提供しやすい環境づくりと、若いドナー(提供者)の確保に力を入れている。

### 移植増目標の骨髓バンク

#### ▽都合つかず断念

今年八月末現在、同バンクにドナーとして登録している人は約五十四万人に上る。年間の新規登録者数は二〇一九年に過去最高の約六万人を記録。翌二〇年は新型コロナウイルス流行の影響で約二万九千人に減ったものの、昨年は約三万三千人と復調の兆しを見せている。

一方、移植を希望して同バンクに登録している患者数は千六百八十六人。移植を受けられた人の割合は近年50%台でほぼ横ばいに推移している。

割合が増えない理由の一つに「ドナーが移植に伴う入院や通院の都合をつけられない」という事例の多さがある。同バンクによると、提供に向けた初期段階で「授業や仕事、家事などで都合がつかない」として提供を断念した人が二年度は約二千七百人に上った。ドナーの事情で提供に至らなかった事例のうち健康上の理由以外の四割強に相当する数字だ。

#### ▽支援する自治体も

企業や大学の中にはドナーが安心して休める制度を設けているところもある。同バンクの集計では約七百二十の企業が「ドナー休暇制度」を、東海大、岡山大、福岡県立大など十校が「ドナー公欠制度」を導入している。

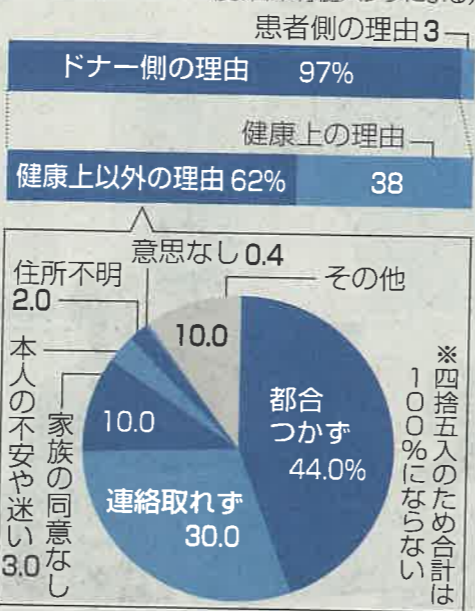
仕事を休むと収入が減る。自営業者や非正規雇用者などでドナーとなった人に助成金を支給する制度を、約九百の地方自治体が設けている。

従業員の健康管理に取り組む企業を経済産業省が「健康経営優良法人」として認定する制度で、ドナー休暇の有無は大規模法人部門の評価項目にもなっている。

同バンクは企業などにドナー休暇の導入を働きかけている。しかし造血幹細胞提供にリスクがあるとして協力を消極的な経済団体もあるという。

# 提供しやすい環境 探る

### 初期段階で造血幹細胞の提供を断念した理由 (2021年度、日本骨髓バンクによる)



## 若いドナー確保にも力

#### ▽アイデアフェス

移植数を増やす上でもう一つの課題は十一世代のドナー登録者の確保だ。登録者で多いのは四十六〜五十一歳。五十五歳までという年齢制限があるため、登録から外れる人は四年後から急増することになる。

また、実際に提供した人の六割は二十〜三十代が占める。同バンクの小寺良尚理事長は「この世代では健康上の理由で提供に至らないという事例が少なく、移植後の治療成績も良い」と話す。

九月に同バンクが広島市で開いた骨髓バンク推進全国大会では初の試みとして、若い世代にドナー登録を呼びかける方策を考える「社会を変えるアイデアフェス」を企画。広島県内の大学、高校のほか島根県立大、九州大から十一チームの計三十五人が参加した。

「キッチンカーと採血カーで全国を巡る」「プロ野球を観戦しながらドナー登録する」などの案が出された中、交流サイト(SNS)で骨髓バンクの認知度を高めるという広島国際大保健医療学部三年の明野遼香さんの発表がグランプリに輝いた。同バンクはこれらのアイデアを若いドナーの確保に生かす方針だ。

## 病理標本ネット公開目指す

精神疾患を除き、病気の診断で基本となるのは「病理診断」だ。臨床医が患者の体から採取した組織や細胞を使い、臨床検査技師が病理標本を作る。それを病理医が顕微鏡で観察し、どのような病気なのかを判断する。

藤田保健衛生大(現・藤田医科大学)教授を務めた愛知県稲沢市の病理医、堤寛さん(モ)は半世紀近くかけて集めた約五千症例の標本をデジタル化しインターネットで公開するプロジェクトを計画。必要な資金千五百万円を十一月六日までクラウドファンディング(CF)で募っている。

堤さんは自宅に併設したクリニックに一万症例余りの標本を保管する。これらの写真を使い病理学の教科書を出版してきた。病理専門医を目指す医師が標本を見るため

### 医療の質向上へ資金募る



訪れることもあるという。

「教科書では、見える範囲にも症例数にも限界がある。ネットで公開すれば、いつでも世界中どこからでも使ってもらえる」と堤さん。まるで顕微鏡を扱うようにパン

コン画面で観察できる「バーチャル顕微鏡」というシステムで標本をデジタル化する(モ)を考えた。

病気ごとに典型的な症例を厳選。寄生虫によるエキノコックス症など日本固有の病気の標本も含める方針だ。堤さんは「医療の質の向上に役立ててもらいたい」と話す。

問い合わせは「つつみ病理診断科クリニック」＝電話0587(66)70080、電子メール pathos223@kind.ocn.ne.jp、CFの情報はこちら <https://readyfor.jp/projects/103977>

自宅に併設したクリニックで病理標本を保管する堤寛さん＝愛知県稲沢市で



## 熱い飲み物にご注意!!



カップに入ったコーヒー。熱いまま飲むことが多いと食道がんのリスクが高まるという

### 英ケンブリッジ大などまとめ

熱いコーヒーを多く飲む傾向がある人は、飲まない人に比べて食道がんになるリスクが3倍近くに高まるとする分析結果を、英ケンブリッジ大やスウェーデンのカロリンスカ研究所のチームがまとめた。

ただ詳しく分析するとコーヒーそのものに発がん性があるわけではないことが判明。食道などの組織が熱によって傷つけられることでがんを

## 食道がんリスク3倍近くに

引き起こす可能性が高いと結論付けた。熱い紅茶でも同じような影響があるとチームはみている。

国際がん研究機関(IARC)も食道がんのリスクについて「飲み物の種類でなく温度に関係している」との見解を示しており、これを裏付ける結果。朝の一杯は少し温度を下げてから楽しんだ方が安心かもしれない。

チームは英国の数十万人分のゲノム(全遺伝情報)データなどを利用。遺伝子の特徴と病気などとの関係を調べる「ゲノム疫学」と呼ばれる手法で分析した。

まずカフェイン代謝や嗅覚といったコーヒーの嗜好などに関わる十数

種類の遺伝子変異が、コーヒーの摂取量と関係していることを確認。その上でさまざまながんの発症状況を分析すると、コーヒーの摂取量が多いと食道がんのリスクが2.79倍に高まることが示された。

ただ消化器以外のがんを含めると、コーヒーの摂取量が多くてもリスクの上昇はみられなかった。一方でコーヒーは飲まないが、紅茶などの熱い飲み物を好む人でも食道がんのリスクが数倍に高まっており、チームはコーヒーそのものでなく飲み物の温度ががんに関係していると指摘した。

研究は欧州の医学誌クリニカル・ニュートリションに発表した。